

§ 4 提案に対する評価調査および最終提案

4.1 提案の評価調査に関する流れ

作成した提案教材の授業での有用性、改善点を把握するため評価調査を行った。評価調査と修正の流れを図2に示す。本研究では提案教材の評価をもとに4度の修正を行い、有用性を高める。

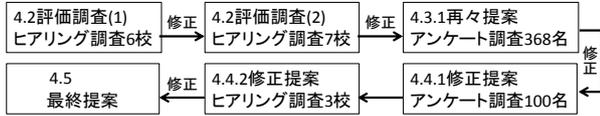


図2 評価調査と修正の流れ

4.2 教員に対する評価調査(1)、(2)と再提案、再々提案

評価調査(1)では、3章で作成した提案教材を、評価調査(2)では評価調査(1)の結果を踏まえ、修正した再々提案を用い、家庭科教員に対してヒアリングの形式で評価調査を行った。調査概要を表3に示す。

表3 教員に対する評価調査(1,2)の概要

調査名	評価調査(1)		評価調査(2)	
調査時期/所要時間	2011年9月	45~90分/1名	2011年10月	45~90分/1名
対象者	高等学校家庭科教員7名(6校)		高等学校家庭科教員7名(7校)	
調査方法	※全員、前報 ¹⁾ のヒアリング調査対象者 インタビュー形式で、教材を見ながら調査項目への意見を得る			
調査項目 (一部抜粋)	提案教材1~4それぞれについて ・構成(流れ)は適切か ・文章量と図、イラストのボリュームとのバランスは適切か ・「学習のまとめ」は適切な内容やボリューム、難易度であるか			

評価調査(1)では「2時間に収まらない」という意見等を、評価調査(2)では「実習のねらいと落とし所を考えた方が良い」という意見等を得て内容の吟味を行った。

4.3 再々提案に対する評価調査

4.3.1 高校生に対する評価調査

前項の結果をもとに再度修正を行い、高校2、3年生368名に対して評価調査を行った。調査の概要を表4に、各教材の対象者数を表5に示す。

表4 高校生に対する評価調査

調査時期/所要時間	2011年10月~11月		25~50分/1クラス
調査対象校/対象者	千葉県、東京都の高等学校5校10クラス ※全て、前報 ¹⁾ のヒアリング調査実施校		高校2,3年生368名
調査方法	教員あるいは自分で教材の説明・授業を行い、アンケートを実施		
調査項目 (一部抜粋)	・教材の内容で興味をもったもの、もてなかったもの ・教科書と教材、どちらが分かりやすいか、どちらに興味をもてるか ※教材は1クラス1教材、回答は選択式(一部記述式)		

単純集計を行うとともに

教材2と3は有意水準5%で性別と学校の偏差値によるクロス集計を行った。その結果、教材2,3とも性別において有意差が見られた。共通して有意差がある項目は「文章量」と「教科書と教材、どちらが分かりやすいか」の2点で、男子は文章で、女子は図やイラストで理解する傾向が見られた。

4.3.2 高校生への評価調査結果に基づく修正提案

前項の結果を受け、各教材の改善点を洗い出し、教科書と教材を比較した際に「分かりやすさ」(61%)「興味

表5 教材別の対象者数

教材	性別	男子	女子	未把握
		人数	37名	39名
教材2	性別	男子	女子	未把握
		人数	61名	42名
教材3	性別	男子	女子	未把握
		人数	38名	40名
教材4	性別	男子	女子	未把握
		人数	40名	33名

のもちやすさ」(66%)で評価の高かった教材2を修正することとした。修正提案はB4用紙4枚、2時間の授業を想定し、現代の住生活と興味付けをポイントとして導入のクイズ、実習として住宅選択等を含めた。

4.4 修正提案に対する評価調査

4.4.1 高校生に対する修正提案の評価調査

修正提案に対する評価調査を行った。調査実施は2011年12月、調査対象者は高校3年生100名、うち男子は71名、女子は29名である。

修正前の教材2の結果と比べると、教材に興味をもった理由に「考える部分が多いから」を選んだ人の割合が2倍以上となった。しかし、男子は文章量を少なく感じる傾向が見られたことから、文章量を増やす必要がある。

4.4.2 教員に対する修正提案の評価調査

修正提案の教員に対する評価調査を行った。調査概要を表6に示す。

表6 修正提案の評価調査対象者

調査時期/所要時間	2011年12月	60分~120分/1名
対象者	高等学校家庭科教員3名(3校)※全員、前報 ¹⁾ のヒアリング調査対象者	
調査方法	インタビュー形式で、教材を見ながら、調査項目への意見を得る	
調査項目	・修正提案について...評価調査(1)(2)と同様 ・教材1,3,4について...改善すると良いポイント	

結果より、基本が載っていてアレンジしやすいこと、生徒が参加しやすいこと、他領域と融合できることに良い評価が得られた。また、全体の構成や実習の設定等の意見も得たため、意見をもとに修正を行うこととした。

4.5 最終提案

修正提案の評価調査結果をもとに、最終提案を作成した。一部を図3に示す。

教員用指導補助教材に授業の流れの例を載せる等、より授業を展開しやすいよう修正した。調査結果を反映し有用性を高めることが出来たと考える。

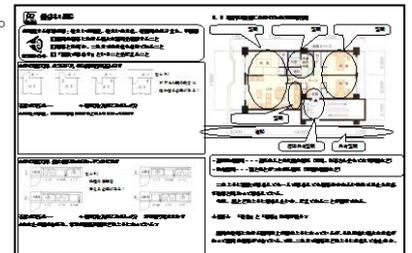


図3 最終提案(一部抜粋)

§ 5 おわりに

現代の住生活に関して、人とのつながりを構築する重要性等を考察し、現代の住生活に即した内容で高校生が興味をもてる教材を作成し、その評価調査では受け取り方の男女差も確認された。今回は教材提案を行ったが、今後は教員の意識を高めることによって、より充実した指導内容を展開していく必要がある。

【謝辞】各調査に協力頂いた各高等学校の皆様へ深謝する。

【引用文献】

- 1) 照林悠・石川孝重・久木章江：高等学校家庭科・住領域の課題と今後のあり方に関する研究—その1 ヒアリング調査による現状の把握—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), pp. 671-672, 2011年9月。
- 2) 浅見美穂：ライフスタイルの変遷からみる住まいの機能に関する研究—女子大生とその家族の三世代の暮らしを対象として—, 日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻2010年度修士論文, pp. 54~161, 2011年。
- 3) 内閣府政府広報室：国民生活白書, <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/index.html>, 2011年6月7日。

*1 大和ハウス工業
*2 日本女子大学住居学科 教授・工学博士
*3 文化学園大学建築・インテリア学科 准教授・博士(学術)

*1 Daiwa House Industry CO.,LTD.
*2 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.
*3 Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Interior, Bunka Gakuen Univ., ph. D.